

あんのんえんこう

宰相山 角屋 圓光寺だより

第一期工事（本堂改修のお知らせ）

本堂の仏具を宮殿をはじめ内陣を充実して改めました。お願いしました仏具店では、工程表を作り約一か月後に完成しました。ご門徒をはじめ皆様の御懇志とご尽力のおかげと感謝し、お礼申し上げます。



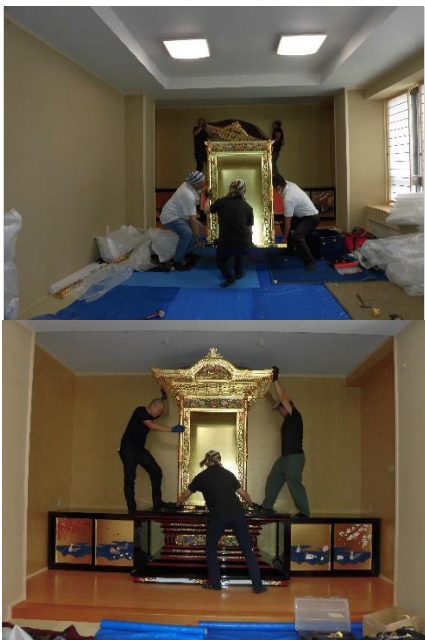
〒五四三・〇〇一三 大阪府大阪市天王寺区玉造本町一三・五
電話番号、FAX 〇六・六七六一・八二九三

令和 五年 8月号 No.九十九
寺報 あんのんえんこう
発行 圓光寺ごほう志会
執筆 足利誠正、正往

解体工事、木工事で部屋の畳、内装を明るく天井を高く仕上げました。十字名号（帰命尽十方無碍光如来）、九字名号（南無不可思議光如来）のお掛け軸をかけて、御本尊の阿弥陀如来は立派な宮殿に安置いたしました。重ねて皆様のおかげで改修が無事終わり感謝いたします。

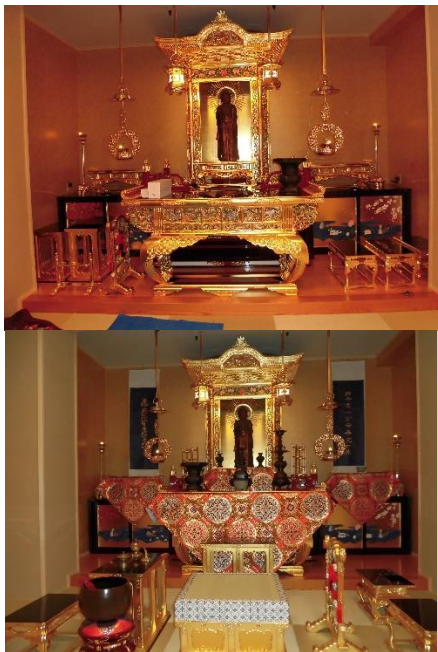
ご遷座法要（改修完成法要）のご案内

今回の改修が無事に終わり、改めて皆様にご披露の法要を行いたいと思います。お恥ずかしなからこれまで仮本堂から初めての大きな法要であり行き届かない点があるかもしれませんが全力で勤めさせていただきます。



つきましては、お勤め、法話という流れで行います。初めての法要ということでご助言いただいている滋賀県西念寺住職、中神章生（しようせい）氏に法話していただきます。

中神氏は幼少期から宗教、哲学に関心を持ち、在家からお寺に入られました。お寺の法務もしながら会社を興され社会経験も豊富です。釈迦の根本仏教から浄土教、親鸞の教えまでわかりやすく話していただけます。



・別途、返信封筒に参加、不参加、〇をつけてお送りください。

日時 9月3日（日曜日）

時間 午前10時から12時まで

法要 おつとめ 法話

(西念寺、中神氏のお話から抜粋)

人間は「無明」(むみょう)のところで生きていく。「無明」というのは「正しく見えていない」ということ。「暗闇の中をさまようようなもの」(迷い)、だから「お釈迦さま」は「真理」を悟って、それを「言語化」した。

「お釈迦さま」が「言語化」したことは、「すべては無常」つまり「変化する」ということと、そして変化するものに「固定した我」はありえないという「無我」ということである。

つまり「悟る」ということは「こういうあたりまえ」なのに「言語化」されていなかったことを「智慧」として「言語化」し、「認識」すること、「真の安定」を得るということ。

「それを腹に据えて生きることが最も安定した心理状態である」「涅槃寂靜」(ねはんじやくじょう)と説いているのが「お釈迦さまの根本仏教」である。

だから「阿弥陀仏」はもともと「インドのサンスクリット語」で「amita bha→アミターバ」といい「一般の人間では思いもよらない智慧」つまりそれを《シンボル化》すれば「光明」ということになる。

「暗闇をさまようような無明の人間に光りをもたらす智慧」という意味を「言語化」したものである。だから「光明」というのは「見えていなかったことが見える」という「智慧(ちえ)」を具体的な内容としている。

そこで、「南無」というのは「namo」で「屈服する」という意味であるが、これは「真理に屈服する」ということで「礼拝」を意味する。つまり「無明で見えていなかった、あたりまえの自然に屈服して《無常無我》を生きる」ことを「ベースにして」生きるというのが、仏教の原点である。

そして、「亡くなった人」を「阿弥陀仏と同じ光明」だと定義して、「自然の摂理に還った(かえった)人」の「人生」が「生前にはわからなかったけれど《思い出やその人との出来事》を思い出すことで」その人のいのちが、「光明」になって「いろいろな智慧」を教えてくれると「解釈」して「法要」を行なうのである。(だから死者は阿弥陀仏なのだ。)

そういう前提で「法要や法事」を「お勤めすること」が「仏事」「法事」である。だから「法事、法要」は、「死んだひとがいいところに行きたい」の「追善供養(ついぜんくよう)」ではない。

こういった前提から「法要法事」は「亡くなった人を《阿弥陀仏》と定義して、《智慧の光》になって、智慧に基づく生き方を教えてくれる」最上の存在であると「讃える」「讃嘆(さんだん)供養」であると定義するのである。

だから、「迷っているのは間違いなく死者ではなく生きていく人間」だから「亡くなった方が阿弥陀仏になって導いて」くれるという「定義」である。

亡くなった人が「私たちの迷い(無明)」を教え「悟り」に導いてくれていると定義することで「亡くなったひと」の人生の尊さを「再認識」できるようにするのが「法事、法要」である。

そういう前提であるから「お経をあげ、お経を聞くこと」は「こちらから「死者」に向けることではなく、「死者つまり仏」からこちらに「悟りの教え」を聞かせてもらっている状況だと「根本的に仏教では定義」する。

もちろん「ただ音読している《お経》を聞く」だけでは「意味不明」だから、本来はその内容を「学習するもの」であるけれど、「お経の音読」を「声明(しょうみょう)」といい、「音読を聞くなかで、亡くなって仏になったひと」の「人生」を思いつつ、「無明を脱出する智慧を得る」ことが「法事、法要のポイント」になる。